

# 待陵通信 第23号

平成25年4月6日  
(敬称略)

①訃報 平成25年3月7日以降に判明した方々 謹んでご冥福をお祈り致します。

16理1 19理甲1 20文乙	加藤 克己 吉森 昭夫 林 治夫	平成25年3月18日 平成25年2月13日 平成25年3月13日	箕面市 豊中市 富田林市
-----------------------	------------------------	--	--------------------

## ②住居・勤務先変更

\*住所変更

- 18理甲3 和田 寛一 〒152-0021 東京都目黒区東が丘1-26-1  
電話 03-3414-2507
- 19理甲1 故吉森昭夫 貞子夫人  
〒560-0081 豊中市新千里北町2-20-15-402  
電話 06-6835-1886

## ③午餐会・懇話会

\*第500回午餐会 25年3月7日(木) 正午~14時30分

於 中央電気俱楽部 317号室  
講師 渡邊 武 元大阪城天守閣館長  
テーマ 「大阪城の歴史と謎」

出席者 3理甲遺津賀美智子・6文甲遺岩根正尚・15文乙藤井甚十郎・理甲三木卓一  
15理乙前田哲郎・山本暉郎・16理2山村好弘・17文1遺山田満知子  
17文2遺藤井炯子・息女・理甲1葉野正之・理甲2山本昭夫・靖子・理乙喜多舒彦  
18理甲1遺新家和己・理甲2宇津敏勝・理甲4高岸宗吾・理乙橋田進  
19理甲1寿栄松憲昭・20文乙池口金太郎・城野伊一郎・理1土橋幸雄・村上和雄  
20理2鶴岡誠・21文甲1頤川勉二・真銅孝三・文甲2露口佳彦・文乙村田正孝  
21理1山田茂樹・山本稔・理2武田晃世・遺藤井文子・理3後藤業明・玉井恭二  
21理4中原充雄・西村順三・22文甲2井本憲伺・理1菅江謹一・理2松浦實  
22理2三島佑一・事務局 阪田訓子 以上41名

## ④各地寮歌祭

\*東京寮歌祭 25年3月2日(土) 於 東大安田講堂地下

参加者 21文甲2 田中昂・22文乙 亀田一彦 以上2名

\*大阪寮歌祭 25年3月24日(日) 於 弥生会館 参加者 19理甲1津田泰男

## ⑤支部だより

\*関東浪高会 3月午餐会 25年3月8日(金) 正午~14時30分 於 新橋 かに道楽  
出席者 12文乙平井廸郎・12理乙出羽皎・13理甲蜂谷謙一・林泉・15理乙岸保芳郎

16理1清岡繁夫・18理甲3石原嘉夫・19文甲2高間宏治・理甲2渡邊衡夫

19理甲4藤田宏・20文乙阪本亮二・21文甲1徳久俊彦・文甲2田中昂

22文甲1前田昭・増井正治・文乙亀田一彦 以上16名

昨今、関東浪高会の運営、発展に多大の貢献のあった庭山先輩、高山先輩、渡邊代表世話人、3氏の訃報が相次いだため、午餐会の冒頭に3氏に対し哀悼の意を表し、ご冥福を祈念して出席者全員により黙祷を捧げた。

続いて、出席者夫々から、故人の生前を懐古し、同3氏との個人的な思い出話を順次披露し、故人の業績を讃え、遺徳を偲んだ。

■故高山栄一氏(元東京会館会長・社長)のお別れの会が3月12日東京会館で開催され、世話人3名(蜂谷、徳久、田中)が参加した。

## ⑥同期同級交歓

\*15回文乙(心塵会) 25年3月23日(土) 13時30分~15時30分

於 新阪急ホテル B1F モンスレー

出席者 黒田登喜彦・小島文三・西新勝憲・藤井甚十郎・八木振次・渡邊佐  
以上大阪・兵庫在住の会員6名が全員出席した。

\*21会(21回同期会) 第90回三木会 25年3月21日(木) 正午~14時30分

於 大阪第一ホテル 6F ランスロット

話題提供 文乙 高橋 衛 廣島大学・福山大学 名誉教授 経済学博士  
大和ミュージアム参与

テーマ 「経済史研究理論の最前線」

出席者 文甲1鈴川勉二・真銅孝三 文甲2露口佳彦・藤田一良

文乙高橋衛・富田三郎・文箭安雄・村田正孝

理1小谷剛造・山田茂樹 理2島隆夫・武田晃世・前田泰敬

理3竹原登 理4川島康生・中原充雄・西村順三

以上17名

## ⑦運動部・同好会だより

\*待兼山俳句会

第523回 25年3月18日(月) 於 大阪俱楽部会議室

句会報は <http://www.osaka-u.jp/haikukai/> を開いてご覧下さい。

## 追 慕

### 庭山 慶一郎 先輩（8回文乙）に捧ぐ

燃える魂の人、庭山先輩は昨年12月7日、95歳の天寿を全うし旅立たれた。庭山先輩といえば、誰でも住専問題を想起される事と思うが、少しだげさに言えば、あの國を挙げてのバッシングにも、先輩は常に「論語」を行動の指針とし、「自ら省みて疚しからず」との信念のもと、いささかも怯むことなく立ち向かい、住専から身を引かれた後、平成10年、約50年間丹精された九品仏のご自宅を手放し、その代金を、住専問題の処理に当たった住宅金融債権管理機構に寄付（先輩の自傳にこう書かれている）され、田園調布のマンションに転居、吾々には「これでさばさばしたよ」と話されていた。

先輩は平成20年毎日新聞より『懐旧九十年—燃える魂の告白』と題して自傳を出版され、小生も頂いたので以下この自傳より引用させて頂く。先輩のご父君は明治より大正にかけて、大阪の日本画画壇の第一人者として庭山塾を開いておられた庭山耕園画伯で、先輩はその長男として大阪の北浜で大正6年出生、愛日小学校より浪高尋常科、高等科を経て東大法学部入学、在学中に高文にパスし、大蔵省入省と、典型的エリートコースを進めた。入省後24歳で奈良の税務署長に就任、一旦本省に戻られたが、昭和19年廣島財務局間税部長として廣島在任中原爆に遭われたが、幸い爆心より2キロ離れた自宅に居られ、建物は半壊したが直接の被爆は避けられた。戦後は本省で税務、金融制度等の改革に尽力される一方、昭和32年より平成3年まで32年に亘り明治大学の講師として、租税法の講義をされている。昭和41年には日銀政策委員という要職につかれ、翌42年に大蔵省を退職、中小企業金融公庫の理事に就任されたが、46年、三和銀行から住宅ローンを専門にする銀行を、他の何行かとも提携して設立するので、庭山さんには是非社長をとの話があり、ここに庭山先輩の日本住宅金融会社がスタートする事になる。

スタート時の出足は好調で、全国に次々支店網を展開、昭和61年には東証一部上場、ローン残高も1兆円に達した。然しこのような日住金の好調を見て、大銀行を初め玉石混交の住宅金融会社が乱立、異常な不動産バブルを引き起こす事となる。この後、大蔵省の融資規制によりバブルは崩壊。住専の挫折と住専たたきが始まり、特に庭山先輩ほどの元凶視される始末であったが、対する先輩の対応は文首に述べた。

かくて庭山先輩がフリーになられてからは、毎新年的関東浪高会午餐会には、先輩に乾杯の音頭をとって頂き、軒昂たるスピーチを拝聴するのが恒例となり、吾々も、常に筋を通して生きて来られたこのような先輩を持った事を誇りにして居たのであるが、今や泉下の人、先日ご子息正一郎様よりのご挨拶によれば、最後は眠るが如き大往生であられた由、これからも安らかにお眠り下さいますよう、心より御冥福をお祈り申し上げる次第です。

### 高山 栄一 先輩（10回文乙）に捧ぐ

本年2月1日、2年年上の庭山先輩の後を追うように、昭和43年以来30余年「東京會館」を率いて来られた高山栄一先輩が帰らぬ旅に立たれた。

東京會館は大正11年、藤山雷太が会長となり、日比谷の皇居前という超一等地に新しい社交場というコンセプトをもって建設され、大正の鹿鳴館とも云われて、東京人にとって特別の場所の一つであった。然し、戦後の社会変動にうまく順応できず、昭和43年頃には経営危機に陥り、昭和33年より會館の監査役であったサントリーの佐治社長に援助を要請した。佐治社長は大赤字になっていた新宿東京會館をサントリーで買取ると共に本体の再建の為、浪高時代よりの親友で、当時三和銀行の取締役であった高山先輩に白羽の矢を立てられた。聞くところによると、高山先輩は当初この銀行マンから落下傘降下のような転身に二の足を踏まれたやの由であるが、恐らく佐治先輩の熱意に、男意気に感ずで引き受けられたのであろう。昭和43年三和に籍を置いたまま東京會館の代表取締役副社長に就任、45年には社長に就かれた。当初は、火付け役でこの業界に詳しい佐治先輩のバックアップもあったであろうが、平成5年5月の関東浪高会午餐会で、高山先輩は始めの頃の苦心談をされた折り「ある夜、閉店後、抜き打ちに社内を回ったところ、守衛が酔っているのを見つけ、直ちに総務部長を呼び、即刻守衛の解雇を命じた」と話されたが、このような社内の弛みを引き締めると共に、貫禄はあるが老朽化した本館の建て直しを決意、昭和46年末に盛大に完成させ、併せて料理人、菓子職人等の充実、育成にも尽力、昭和50年には来日された英國エリザベス女王の財界団体による歓迎午餐会が開かれたほか、各国国賓の歓迎式典が開かれる、というまでの華々しい復活、発展を果たされたのである。

このような高山先輩の威光のおかげで、吾々浪高生はいわば他所者にも拘わらず、伝統ある東京會館を大きな顔で利用する事が出来、中でも浪高創立70年記念式典では、正にエリザベス女王歓迎式典の開かれたローズルームを式場として、各旧制高校の代表を招待、300名を越す参加者で盛大に開催、各校からは「さすが浪高、大したもの」との賞賛を得た。その後85年記念まで5年毎の記念式典は何れも東京會館とすることで、各校にも人気があり、吾々も誇りを持って開催したものであった。

それ以前も春歌祭などの森下元会長等の活躍で「東京にも浪高あり」との評価は得ていたが、この東京會館での記念祭により、わが浪高の存在感は格段に上がったと言える。この事はひとえに東京會館の社長が高山先輩であった故の事で、吾々は高山先輩を誇りとし深甚の謝意を表すると共に、心より御冥福をお祈りするものです。

尚、本稿については資料をご提供頂いた東京會館総務部、井出副部長に厚く感謝します。

（上記2文 13回理甲 蜂谷謙一 編）